

岡野谷先生 インタビュー記事

【岡野谷さんは普段何していらっしゃいますか？】

「特定非営利活動法人日本ファーストエイドソサエティ（JFAS）」という団体の代表理事をしております。活動目的は「未来を担っていく子どもたちに安全・安心・健康な社会を引き継いでいこう」ということ。そのために私たち一人ひとりには何ができるのだろうか。大人も子どももみんなと一緒に考えて、大切だと思ふことを活動に移していこう、ということです。自己紹介をしますと、よく「名前にあるファーストエイドって何？」と尋ねられます。ファーストは最初の、エイドは手当て、つまりファーストエイドは「応急手当」のことです。「それなら応急手当普及協会とかにすればわかりやすいのでは？」というご意見もよくいただきます。ごもっとも。でも私たちは、応急手当というテーマを皆で学び、皆で広める活動をしたかったので、普及という言葉はあまりふさわしくないと考えたのです。英語のまま、ファーストエイドという言葉を知ってもらおうと、応急手当をする人々の集まり、つまり、ファーストエイド・ソサエティという名称にしました。現在では全国で「応急手当」や AED の使い方などについて学んでいただいたり、イベントやお祭り、スポーツ大会などで救護班として活動しています。また、災害時の被災地支援も重要な活動となりました。

【スフィア基準とは何ですか？】

スフィア基準とは、端的に言えば「被災者の尊厳ある生活を確保するために何が必要か」ということを示したものです。被災者にとって本当に大切なものを適切に提供することがスフィア基準の理念ということになります。

さらに重要なことは、「すべての指標や基準をクリアする」ことが重要なのではなく、実現が不可能な場合に被災者にどのような悪影響があるかどうかを検討し、最小化するための措置を講じるからこそ「スフィア基準の理念に沿う」ことである、とハンドブックには明記されています。

【スフィア基準誕生のきっかけ】

スフィアの起こりは、1994 年のルワンダ大虐殺という事件（阪神淡路大震災の 1 年前）にさかのぼります。この内紛で 50~100 万人が亡くなり、たくさんの人々が国内外に避難しました。

その避難民を各国から駆け付けた NGO 等が支援したのですが、その支援中に 8 万人が亡くなってしまいました。日本で言う災害関連死に近いものです。2 年後の 1996 年、今回の活動について合同調査を行ったところ、国連や NGO の対応が、場当たりの調整不足・説明不足だった、とい

った課題が明らかになりました。そして、この課題をなんとか解決しようという目標に向けて、1997年にスフィアプロジェクトが誕生し、2000年にスフィアハンドブックの初版が発行されました。

【日本での広まり】

2011年に起きた東日本大震災の後、海外から訪れた支援者の多くがスフィアハンドブックを持っていたことが契機となり、多くの支援者がスフィア基準を知ることになりました。今では随分認知度が上がり、最近では、支援者の評価、活動費助成、寄付支援といった事項にスフィア基準が活用されています。

一般に国内の災害支援において、災害弱者は一括りにされていますが、スフィア基準では、障害者、高齢者、外国人やLGBTといった方たちに、各々適切な物を供給しましょう、と謳っています。これは「平等性」を主とする行政には苦手な手法ですが、徐々に「公平性」に重きを置いた人道支援ができるように切り替えていけたらと思っています。阪神淡路大震災の時、3,000人ほどいた避難所に2,000食のお弁当が届いたことがあります。今よりも「平等性重視」の時代だったので、「1人に1個、配れる数を確保するまで配布しない」と決めた結果、食糧を腐らせてしまい、結果的にお弁当は廃棄されてしまいました。現在では、この様な残念な判断をせず、子どもや年配者には先に配るという配慮もできています。支援は、被災された人々が何を求めているのかを、的確に判断し、適切な支援を行なわなければなりません。

【人道支援の原則】

スフィア基準の理念に基づく人道支援では、被災者や避難民の尊厳ある生活への権利を守るために活動します。そのために最も重要な視点は、「人道支援を受ける権利」です。人道支援とは、与えるものではありません。避難所でも尊厳ある生活を維持するために「自分は支援を受けて良いのだ」ということを、もっと多くの人に知ってほしいと思います。

日本人は「自分で頑張りますから」と言って人道支援を遠慮してしまうことが多いですが、今までと同じ生活をするために支援を受けることは国民の権利で、遠慮することはありません。スフィアハンドブックには、人道支援を行なう際には必ず、「尊厳のある生活への権利」、「人道支援を受ける権利」、「保護と安全への権利」の3つを実現しましょうということが書かれています。これを、共通の原則「人道憲章」といいます。

【支援の国際基準】

スフィア基準を理解するために、国際基準の知識を正しく身につける必要があります。これは、どの国のNPOやNGOの活動にも共通します。多くの関係者と一緒に活動を進める際に、支援のゴールについて共通認識をもって活動することで、最低限の質を保った迅速な活動を実施することができます。スフィア基準では、現地のニーズに合った支援、現地関係者の意見の反映、人々をさ

らなる危機にさらさない、団体間の協働、スタッフの安全確保という視点を掲げています。その後、人道支援における主な支援分野として「給水と衛生」、「食糧の確保と栄養」、「避難所/キャンプ等と生活必需品」、「保健活動」についての基準が続きます。これらの基準に基づき、被災者個人やコミュニティの経済復興につながる支援や法律相談などの情報に関する支援が行なわれています。

また、子ども、女性や高齢者、特定の疾病や障害を持った人など、被災時により弱い立場に置かれがちな人たちの支援を受ける権利を守るための活動も行なわれます。多岐にわたる支援活動ごとの実務に沿った基準が作られているため、支援活動に関係する組織や実務者が学習し、実践に活かしています。スフィア基準の改定や開発、それらの普及と定着活動のため、日本の NGO 関係者も積極的に参加しています。

【支援の考え方について】

スフィア基準を活用した東北地域での面白い事例をご紹介します。適切な時期に適切な支援をするという観点から、被災地の精肉店を支援するために、物資や金銭を送るのではなく、営業可能な店舗に県外の精肉店仲間が「避難所での炊き出し用」に肉を発注し、支払いをするという手段を取りました。この支援により、被災地の店舗は、店は開けられなくても収益を得られ、避難所では安定して肉を食べることができ、直接経済を回すことができました。

これは、間接的支援である物資や金銭を送るという手段に比べ、スピード感で勝ります。木材は復興の際に必要となりますから、日本木青連での支援のスタイルとして参考になるのではないのでしょうか。林業機械などは災害発生直後の復旧・救助活動に役立つことがあります。ただ、支援のシステムに完全に組み込むまでには至っていないため、ここを整備すると良いかもしれません。

【スフィア基準の観点から、ウッドトランスフォームシステムに期待する事】

私は仕事上、日本だけでなく世界も含め多くの被災地を見てきました。日本の避難所は、テレビの映像などで観られるように、多くの場合学校の体育館や公民館といった「板の間」となっており、そこで床に直接布団を敷いて、身を寄せ合って過ごすというのが一般的です。しかし海外ではスフィア基準が浸透している事もあるのですが、元々ベッドで寝る文化があるので、避難所には簡易ベッドが設置されることが多いです。ウッドトランスフォームシステムで、学校や体育館などで快適な居住空間をその場で提供できるようなアイテムがあれば、重宝されるでしょう。例えば変形した簡易ベッドの下に収納スペースがあれば便利だと思います。

また、被災者の生活は肉体だけでなく精神的にもつらいことが多いです。例えば、多くの避難所では、感染症やアレルギーの問題があるため、ペットとは同居できないのですが、昨年の最優秀賞受賞作品「部戸を活用した防災拠点」の様なスペースがあれば、それを「ペット専用の小屋」にすることで、大切なペットと一緒に生活ができるかもしれません。ほかにも小さいお子さんの授乳室や、遊び場にするなどすれば、プライベート空間が有効に利用でき、普段と同じような生活が可能

となります。

また、避難所には遊具や子どもの遊び場もないので、防災製品のご提案に加えて、おもちゃとして使える物も大変重要です。その様な観点から、スフィア基準の理念に沿った、被災地に潤いを与えてくれるような発想を下されるとより実践的であると思います。

以上